

# Q. どんな教育をしているの？

## 峡南幼稚園 ～副園長・徳田和子さんに聞きました～

「教育というと、机に座ってのお勉強、英語や漢字や俳句をイメージする方もいるかもしれませんが、それが子どもが小学校に上がった時のことだけを考えているのだったら問題です。子どもの“今”を大事にしなくては。今だからこそやるべきことがあるのに…」

モンテッソーリ教育を行っている峡南幼稚園の午前中は“お仕事”の時間。子どもたちは“教具”と呼ばれる教材を使って、思い思いのことをしている。積み木のようなものを積み上げたり、色紙を編んだり、図鑑を見てお花の絵を描いたり…。一人黙々とやる子もいれば、友だちとにぎやかにやる子もいる。よく見ると年齢もバラバラだ。この時間、子どもたちは、好きなことに好きなだけ取り組んでいいのだという。先生はでき上がったものを見て何か言ったり、何かやりたがっている子に声をかけたりしている。



### 子どもは自分で自分を作る

「大人たちの役割は、子どもたちの『やりたい』という気持ちに応えるための教材と時間を整えてあげることです」

一つひとつの教具には、数の認識、色の識別、大小の識別などの意図があるのだが、それよりも大事なことは、自分がやりたいことを自分で選んでやるという



こと。それは集中力や一つのことをやり遂げる意志や自信につながってゆく。

「それが“自分を作る”ことだと思っています。子どもは、自分が成長するために何が必要かということを本能的にわかっているんです」

例えば、小さい子が側溝の穴に小石を延々と落とし続けている。大人から見れば意味のないことだが、それは実は子どもの発達にとって大事なこと。指を使って小石を持って、穴を狙って、それを離す。大人のように上手にそれができない時期だからこそ、自分の手を目一杯使ってやってみたい。そこで指の発達が進むのだが、それを子どもは誰からも教えられずにやっているのだ。モンテッソーリの教具は、そんな子どもの“成長したい”無意識を意識化させる道具でもある。

「ある子が、小さな織機を使ってやる“機織り”にようやく成功したことがありました。すると『もっとやりたい!』と言ってずーっとやり続けたんです。何かに取り憑かれたような感じで2時間が過ぎた後、その子の表情はとても満足げで自信がみなぎっていました。私は、それがこの子にとっての適切な教具だったんだと思い、またこれこそが子どもの成長だと感じたのを覚えています」

### 子どもへのまなざし

一つの教室に一体いくつの教具があるか、先生たちもわからないのだという。50？もしかしたら100以上かも？彼女たちは、何回もの研修を経て、教具一つひとつに関する綿密なノートを作っている。教具そのものの意図は、どう誘うか、どうほめるか、先生と子ども一対一のやりとりで育まれる言葉や人間関係は…。そして一人ひとりの子をどう見るか。これはたぶんノートには書いてない。

「家庭の事情でほとんど外遊びの経験がないまま幼稚園に入ってきた男の子がいました。友だちとの遊びができず、おもちゃや三輪車を人にむかって投げればかりいような子で、お仕事にも見向きもしなかったのですが、私は今はそういう時期かなと思って見ていました。2、3ヵ月たって彼がふと教室に入ってきた時、『そろそろいいかな』と“縫い取り”というお仕事に誘ってみたら、それをやってくれた。『もう一度やる?』と言ったら4枚も5枚も一気にやったんです。それをきっかけに、少しずつですが彼の生活にまとまりができました。それからしばらくたってですね。彼が私に『先生ありがとうね』って言ってくれたのは] 矯正はせず、どの時期に何をするかということ子どもに任せる。それが子ども自身の自立につながっていく、というのが峡南幼稚園の考え方だ。



### 自分の人生の主人公は自分

「峡南幼稚園を出て小学校に上がった子たちは、集中力がある、器用だ、物事に系統立てて取り組む力があるとされます。自分の目標を決めたら、それにむかってコツコツやる。“お仕事”で培ったそんな姿勢は、学業や仕事など生きていく上では大事なことです。今、この幼稚園で、自分で何をしたいかを自分で考え選ぶことを経験している子どもたち。彼らは、自分の人生の主人公が他でもない自分であることを学んでいるのだと思っています」

